

オモチャ屋さん



設定

男をラバースーツに包まれた言いなりのオモチャに変えてしまうオモチャ屋のお話です。オモチャにされた人間の動きを停止させるチップが出てきたりと、少しSF要素もあります。

ノンケ消防士角田晃を主人公として物語を展開しています。

登場人物

角田 晃(つのだ あきら) 26 歳 消防士(歴 4 年目)

真面目で責任感が強い。理不尽なことには上司であっても意見する。

城田 雄三(しろた ゆうぞう) 50 歳 消防士(歴 25 年)

現場経験豊富で、過去に多くの修羅場をくぐってきた自負がある。「怒鳴るのは愛情」「部下は従って当然」という価値観をもつ。威圧的な言動や人格否定を繰り返す。

高橋 直輝(たかはし なおき) 35 歳 消防士(歴 13 年)

仕事はでき、後輩からの信頼も厚いが、黒田に正面から逆らうことはせず、衝突を避けている。

企画

消防署の詰所。夕方の点検が一段落し、乾いたサイレンの残響だけが耳に残っている。

「おい、まだ終わってないだろ。何回言わせるんだ」

机を叩く音が、思った以上に大きく響いた。晃は背筋を伸ばし、敬礼しかけて、途中で手を下ろした。

「点検表はすべて確認しました。ホースも、、、」

「確認“したつもり”だろ？」

城田は言葉を被せるように遮り、鼻で笑った。

「お前はな、いつもそうだ。動きが遅い、判断が甘い。」

周囲の隊員たちは視線を落とし、誰も口を挟まない。エアコンの送風音だけが、不自然に大きく聞こえる。城田は部下の言い分は一先聞かない。ただ、何かと口実を見つけてはしかりつけ、優越感にひたっている。

「申し訳ありません。次からは、、、」

「次から？ 次があると思っているのか？ 命預かる仕事だぞ。お前みたいなのがいると、全体が迷惑なんだよ。」

晃は唇を噛み、言葉を探したが、喉の奥で止まった。確かに指示されたことはきちんと終えている。それを伝えても、もう一度やれの一点張り、また無駄な残業を強いられるのか、、、それでも、これ以上反論すれば火に油を注ぐことは、もう分かっている。

「態度がなってないって言ってるんだ。感謝しろ。俺が鍛えてやってるんだ。」

しばらく沈黙が落ちる。やがて上司は背を向け、吐き捨てるように言った。

「今日はもういい。だが覚えとけ。お前はまだ、消防士ですらない。ここのお荷物だってことを忘れるな。」

足音が遠ざかり、詰所に残ったのは、張りつめた空気だけだった。晃は深く息を吸い、ゆっくりと吐いた。

城田はいつもあんな態度をとっておきながら城田の娘とのお見合いをするようにしつこく言ってきたり、散々晃を飲みに誘ってきたりするからタチが悪い。見合いに関しては正直全然タイプじゃないし、そのうえ、城田が義父になるなんて死んでもごめんだ。飲みにしてもあれこれと無茶ぶりされるだけだ、、、。

「大丈夫か？こっぴどく言われたな。ああいうときは黙ってもう一回やればいいんだよ。俺も手伝うからさ。」

「先輩、、、そんなの無駄だって思うんすよ、、、きちんと確認してるの

に、、、。」

「まあお前のまっすぐな性格嫌いじゃないがな、あの方の言うことは聞いておけ。今日は疲れたろ、早くあがれよ。」

先輩の高橋は優しく笑って晃をフォローしてくれる。こんなに優しくてカッコいい先輩が何であんなやつのこと尊敬しているのか理解に苦しむが、きっと自分は知らない歴史があるのだろう。

晃は、高橋のおかげで少し減ったイライラを抱え、その日は消防署のすぐそばにある寮に早めに戻った。

晃は「何でもない」、、、、そう思っていたはずなのに寮に戻ると眠気が襲ってきて、すぐに眠りについてしまった、、、。

設計

翌朝目が覚めると、見知らぬ場所で全裸にされ、両手両足をロープで拘束されていた。

（な、、、どこだよ、、、ここ、、俺は寮にいたはずじゃ、、、。というか何で、全裸！？何で縛られてる！？わけわかんねーな、、、俺金なんか持ってねーぞ、、、。）

そこに優しくそうな白髪の老人がやってくる。

「ちょ、これ、、、なんですか？なんで、、おれこんな、、、。」

「君は黙って私に従ってればいい、、、。」

「な、、何言ってるんですか！従うって、ペットじゃないんだから！早くこのロープほどいてくださいよ。」

騒いでいる晁に男はだまったままホースを持つと、そのままノズルをひねり、晁に大量の水をかけていく。

バシャーーーーー！

「ぐう、ちょ、ちよっと、、、まって、、ぐ、、ごぼごぼ、、、。」

（息、、、が、、、息ができない、、、。）